

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成20年度 技術情報第6号(水稻のヒメトビウンカ)について (送付)

水稻のヒメトビウンカについて、下記のとおり取りまとめましたので送付します。

平成20年度 技術情報第6号

- 1 対象病害虫 ヒメトビウンカ (イネ縞葉枯病)
- 2 対象作物 水稻
- 3 飛来状況等
 - (1) 6月5日のジョンソントラップ(農業開発総合センター内:南さつま市金峰町大野)において、106頭(♀52頭・♂54頭)のまとまった誘殺が認められ、農業開発総合センター内の水田ほ場(中期5月16日植え)で、1株当たり5~6頭程度(6月9日調査)の成虫が認められた。
 - (2) 6月9日の北薩地域振興局農林水産部出水支所管内及び大隅半島の早期水稻栽培地帯での発生状況調査では、発生は認められたものの、50株当たり数頭と少なかったことから、薩摩半島の南さつま市付近を中心とした飛来と思われた。
 - (3) 農業開発総合センター(南さつま市金峰町大野)内の水田ほ場で採取したヒメトビウンカ(雌成虫)について、DAS-ELISA法によりイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率検定を実施した結果、9.2%(検定虫数120頭)と高かった。

※ イネ縞葉枯病

ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス(Rice stripe virus:RSV)によって引き起こされるウイルス病。生育初期に感染すると新葉がコヨリ状に巻いて下垂する特有の症状(ユウレイ症状)を示し、激しい場合は枯死する。後期感染では、穂の出すくみや奇形穂、不稔を起す。

RSVは幼虫、成虫とも保毒・媒介が可能であり、また高率に経卵伝染する。

4 現状と今後の対応

- (1) 本県におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯病の発生は、平成17年頃までは少なかったが、18年以降増加傾向にある。
また、近年、九州中部以北の各県では、コムギの栽培面積の増加等に伴い、イネ縞葉枯病保毒虫率の上昇と一部地域での多発生が問題となっている。
- (2) 近年、飛来源の一つである中国中部でヒメトビウンカとイネ縞葉枯病が多発していることから、今後も保毒個体の飛来が予想される。
- (3) 普通期水稻では、移植前にウンカ類に効果の高い箱施薬剤を施用する。
- (4) 田植後は、海外飛来性害虫(ウンカ類、コブノメイガ)の飛来と発生状況に注意し、イネ縞葉枯病の発病株を認めた場合は速やかに抜き取る。

